

《北陸ブロックの方々、セミナー参加者の皆様方へ》

企画運営なされた北陸ブロックの方々、そして担当理事の石井パークマン麻子先生、たいへんお疲れ様でした。北陸ブロックの方々や地元の方々の優しく、人情味あふれるおもてなしを受け、心底ほっこりしました。現場セミナーの内容の深さ、期待通りの楽しい酒宴、晩秋の里山の景色・・・、どれもが大満足でした。本当にありがとうございました。

【1日目:シンポジウム「誰が担う？買い物弱者支援！」】



・小国地域の現況報告;長岡市社会福祉協議会小国支所長 小林 雅巳氏

* 人口:6104人、高齢化率:38%、一人暮らし世帯:212、高齢者世帯:304、全世帯数:2000、公共交通の廃止・減便、小売店の閉店・商店街の衰退、社協の高齢者生活支援サービス:配食サービス・ふれあいいきいきサロン・小地域ネットワーク活動・除雪支援活動・ボランティア銀行、NPO 法人 MTN(もったいない)サポート=コミュニティバス・乗合タクシー“オーケーバス”運行

・シンポジウム;「誰が担う？買い物弱者支援！」

パネラー:・村山 博幸氏;(株)山の駅もったいない村取締役

・大橋 毅氏;法末地区民生委員 ・佐藤 富夫氏; A コープ小国店長

・三五 光一氏;刈羽村社会福祉協議会事務局長

コーディネーター:青木 茂氏;新潟医療福祉大学講師

* 山の駅もったいない村の取り組み;(ネットでぜひ検索してみてください)

御用聞きと見守り(脳梗塞で倒れていた高齢者を救出、一つでも配達)、直売、移動販売
郷土食提供、農産物の加工販売事業、宅配弁当、葬祭サービス(同敷地内に山の駅もったいない村運営の葬儀場がある。火葬場も隣接。以前は小千谷の葬儀場まで行っていた)

* 法末地区民生委員、過疎地に住む住民の立場から;

法末地区はシンポジウムの会場となった長岡市小国地域総合センターから車で25分のところにある。高齢化率72%、30~40代ゼロ。集落組織の崩壊・互助精神の欠如が切実な問題となっている。中越地震の時は道路が崩れ孤立。春は田植え、夏は蛍、秋は稲刈り・農作物の収穫、冬は雪かき等々の経験が

できる。小国の雪解け水が魚沼のコシヒカリに負けない美味しいお米を作る。自然豊かな里山。買い物弱者老人は買物は物を買うだけでなく“外に出る、コミュニケーションを育む憩いの場”であることを求め、訪問・集落販売所・販売車・店舗までの交通網の確保等々、複合的な手立ての整備を望んでいる。

* A コープ小国の取り組み；

買い物バス(移動購買車)利用の変遷: 運行を開始して 30 年。運転できる人の増加で現在、限られた固定客にとどまり、新規利用はごく少数となっている。買い物バスを利用できる方はある程度健康でないと利用できないという制限がある。

買い物お助け隊としての機能: 電話で 2000 円以上注文した方への無料配達(雪の季節には利用者が増加)、地域密着の店舗として赤字覚悟で運営していく、ネット販売を広める(着実に増加)

* 刈羽村社会福祉協議会の取り組み；

近所や親族が本人の代わりに買い物や同乗して買い物に行く。行政: 福祉タクシー利用料助成、社協:(無償支援)買い物時にバスに同乗して買い物支援。無償だと気兼ねをすということなので現在、有償で支援する方向で準備中。地域住民間の支えあいの仕組みを作るため、買い物だけでなくゴミ出し・話し相手等の困りごとにも対応していきたい。

* 質問タイム；

長岡市社会福祉協議会に“買い物弱者といわれる人がどのような生活支援を必要としているのか”“本当に必要とする人はどのくらいいるのか”についての実態調査をしているかという質問がありましたが「していない」という回答でした。人材も予算も限りある中で支援をしていくわけです。有効な支援を提供するには実態調査は必須です。こういった面で、調査・分析の技法をもちえた学会員との連携が期待できるのではと思いました。

* コーディネーター青木 茂氏のまとめ；

①地域住民ができること

- ・個別の事情(心身状況・住宅環境・世帯状況等々)に応じて買い物の方法を組み合わせることができる
- ・地域で支えあう: 購入方法の効率化(共同購入・とりまとめなど)
- ・移動販売車の駐車への協力: 自らの駐車場・庭先の提供
- ・宅配の一部を住民が担当する

②地元の商店・スーパーをつぶさない

- ・多少価格が高くても地元の商店・スーパーを利用することを心がける
- ・高齢者になって買い物が不便になった時、近くにお店がなくて困るのは自分
- ・店をつぶさないための地域の力の結集・多少高くても買い支えることの重要性
- ・商店側もこういった動きに応える姿勢をもつ

③付加価値をつける

- ・「宅配」と「見守り・声かけ」をセットにする
- ・「宅配」で電球・電池交換などのちょっとした生活支援をする
- ・スーパーの送迎バスを病院・役所まで延長し「コミュニティバス」にする
- ・移動販売は「食品・日用品」以外にも「衣料・雑貨」などのご用聞きもする。

【所感】

小林さん(長岡市社会福祉協議会小国支所長)がシンポジウムの冒頭に、「買い物弱者支援のテーマがなんで小国なのか?」とおっしゃっていたことが記憶に残っています。買い物弱者支援で頭を悩ませているのは小国に限

ったことではありません。今、同じ問題を抱える地域がどれほど多いでしょうか…。関西ブロックが取り組んでいるテーマ「限界集落」と深く関係します。

伺った法末地区(懇親会情報交換会の会場;法末自然の家「やまびこ」)は民家も点在、お店は見当たりませんでした。高齢者になったら余程、足腰が強く、移動手段を確保できなければ到底、外出できそうにない…。そう感じました。

人間は心身機能が低下すると外との接点から喪失します。外出・買物・交流・仕事…。それらに共通することは「移動の喪失」です。そのような喪失状態で「生活の質向上」「自分らしく生きる」という言葉はあまりに現実味がありません。そのような状況下にその方々が継ぐてきた文化はあるのでしょうか?石井先生がおっしゃる通り、私も過疎地への生活支援は“公”の役割と考えています。一人では生活を立て直すことができないとしたら、最低限度の生活が保障されているとはいえません。民間事業のサービスはやはり採算が優先されます。介護保険で生活支援すべてをまかなえるとはとても思えません。そこを公的機関がしっかりと生活保障するくらいの気概性をもって欲しいものです。格差はこうした勘違いから生まれるのでしょうか。もっと大切なことといえば、高齢者は生活支援サービスを上手に、そしてお金を有効にふんだんに使うことでしょうか。かなりの意識改革が必要だと思います。自分らしい生活を継続するか、不自由な生活に甘んじるか…。個々人の価値観が暮らし向きにも大きく影響することを改めて考えさせられました。

**【二日目:フィールドワーク1:餅つき・法末地区視察、
フィールドワーク2:(株)山の駅もったいない村・葬儀場視察】**



【所感】

(株)もったいない村の厳しい運営状況に対し「もったいない村に賛助会員制度を作っ
てはどうでしょう」という石井先生のアイデアは、ぜひとも実現したいです。村山社長の頭の中にはすでに構想が練
られているかもしれません。お互いにできることを少しずつ紡いでいく…。必ず大きな力になります。行動に移すこ
とは現地に足を運んだものの務めでしょう。もったいない村のブログは多くの方に読んでいただくようにアピールし
ましょう。ネットで販売もしているそうです。「小国の米は美味しいです、食べてください」と社長も勧めていました。

[もったいない村ブログ](#)←ここをクリック

[もったいない村お米の注文☆](#)←ここをクリック

全国的に厳しい冷え込みになっています。小国はきっと雪景色になっていることでしょう。11月24日は例年雪が
降る確率が高いとのことで楽しみにしていたのですが、今年は少し遅かったようです。毎年4~6mは積もると
か…。中越地方は長く、厳しい冬に入りました。